

## ルカによる福音書 16 章 「富の使い方」

### 1A 永遠の住まいと不正の富 1-13

1B 不正の管理人 1-8

2B 御国への投資 9-13

### 2A 人の前の正しさ 14-18

### 3A 金持ちとラザロ 19-31

1B ハデスにある二つの行き先 19-26

2B 復活しても聞かない心 27-31

## 本文

ルカによる福音書 16 章を読んでいきます。私たちは、まだ安息日における出来事を読んでいません。安息日に、イエス様がパリサイ派の指導者の家に招かれて、そこで中風の男が目の前にいたところから始まり、食卓での話が多く出てきました。それから、イエス様は席を立ちました。そして今度は、イエス様は罪人や取税人と共に食事をしておられました。そこで律法学者やパリサイ人が、つぶやいたのです。しかし、イエス様は彼らが神の心を見失っていることを、譬えによって示されました。それは、「失われている者を捜す」という心です。九十九匹の羊を置いて、一匹の迷える羊を負う姿。失った銀貨を家中探している女がいます。そこには、見つかったことの喜びを御使いと共に祝っている姿が描かれています。ここに、神が持っておられる救霊の情熱が描かれています。私たちがイエス様と心が一つになっている時に、このように失われた人々への情熱が与えられるのです。

そして、放蕩息子の譬えをイエス様はされました。そこでは確かに失われたけれども見つかった弟息子が書かれているのですが、もっと大事なのがこれがパリサイ人や律法学者に語られていたことです。兄息子の問題を取り上げていました。息子が家の中にいたのに、父の心を理解していなかった、遠く離れていたことを見ることができます。

### 1A 永遠の住まいと不正の富 1-13

そして、そこには弟子たちもいました。イエス様は弟子たちに教え始められましたが、そこにはパリサイ人と律法学者もいて、その話を聞いていました。イエス様は弟子たちに教えられたかったことは、「富の管理」についてです。今、放蕩息子の譬えで財産を父が分け前として与えることを話しておられたので、自分たちに与えられている財産をどう管理すればよいのかについて、教えられます。ルカによる福音書において、人が病に罹っていたり、悪霊につかれていたり、経済的に貧しかったり、人間全般の「貧しさ」を強調しています。イエス・キリストの福音が、いかに人の財産と関係してくるのか、それを今晩は眺めてみたいと思います。

## 1B 不正の管理人 1-8

16:1 イエスは、弟子たちにも、こういう話をされた。「ある金持ちにひとりの管理人がいた。この管理人が主人の財産を乱費している、という訴えが出された。16:2 主人は、彼を呼んで言った。『おまえについてこんなことを聞いたが、何とということをしてくれたのだ。もう管理を任せておくことはできないから、会計の報告を出しなさい。』16:3 管理人は心の中で言った。『主人にこの管理の仕事を取り上げられるが、さてどうしよう。土を掘るには力がないし、こじきをするのは恥ずかしいし。16:4 ああ、わかった。こうしよう。こうしておけば、いつ管理の仕事をやめさせられても、人がその家に私を迎えてくれるだろう。』16:5 そこで彼は、主人の債務者たちをひとりひとり呼んで、まず最初の者に、『私の主人に、いくら借りがありますか。』と言うと、16:6 その人は、『油百バテ。』と言った。すると彼は、『さあ、あなたの証文だ。すぐにすわって五十と書きなさい。』と言った。16:7 それから、別の人に、『さて、あなたは、いくら借りがありますか。』と言うと、『小麦百コル。』と言った。彼は、『さあ、あなたの証文だ。八十と書きなさい。』と言った。16:8 この世の子らは、自分たちの世のことについては、光の子らよりも抜けめがないものなので、主人は、不正な管理人がこうも抜けめなくやったのをほめた。

この譬えについて、多くの人がいったい何のことなのだろうと迷います。8 節において、主人が不正の管理人のことをほめているので、訳が分かりません。もっと悪事を働いているのに、怒るところかほめているのです。現実の世界では起こりえないことです。そんなことを言いますと、放蕩息子の譬えも、現実の世界ではほとんど起こりえない話でした。けれども神の世界の中では起こるのです。失われていた者が見つかった喜びで、子の身分を回復させてくださるのは神の御心であります。この不正の管理人の譬えも、現実の世界で考えるのではなく、神が財産についてお考えになっていることを教えるための譬えであります。

鍵となる言葉は、「抜け目なさ」であります。主人がその抜け目なさをほめています。管理人は、自分が解雇されることがはっきりしていて、それで今できることで、将来の保障となることは何だろうと考えました。そこで、債務のある者たちの、その証書の額を減らすことを行なうことによって、解雇された後に、自分に義理のある人々が迎え入れてくれるかもしれないと思ったのです。自分の今、任されている富を将来の命のために抜け目なく使っていったのです。ここが要点です。

## 2B 御国への投資 9-13

16:9 そこで、わたしはあなたがたに言いますが、不正の富で、自分のために友をつくりなさい。そうしておけば、富がなくなったとき、彼らはあなたがたを、永遠の住まいに迎えるのです。

イエス様は、不正の管理人の譬えによって、一つの真理を教えておられます。これは山上の垂訓の中にある、「自分の宝は、天にたくわえなさい。(マタイ 6:20)」と同じです。つまり、私たちが日々歩んでいる生活を、将来の永遠の御国のために抜け目なく活用していきなさい、ということがあります。今、この地上で行っていること、また持っているものを、永遠という将来設計のために用

いていきなさいということでもあります。

16:10 小さい事に忠実な人は、大きい事にも忠実であり、小さい事に不忠実な人は、大きい事にも不忠実です。16:11 ですから、あなたがたが不正の富に忠実でなかったら、だれがあなたがたに、まことの富を任せるでしょう。

興味深いですね、イエス様は富について、「小さい事」としてお語りになっています。富こそが、大きな事ではないかと思うのですが、弟子たちにとっては地上の富は些細なことなのです。そして、自分に与えられた財産や時間を、主のために、永遠の御国のためにいかに用いていくのか、しっかりと考えていきなさい、ということです。私たちが地上で行っていることに従って、この体で行っていることで、神は報いを後の世で与えられるからです。

16:12 また、あなたがたが他人のものに忠実でなかったら、だれがあなたがたに、あなたがたのものを所持させるでしょう。

イエス様は、この世にある富を「他人のもの」と呼ばれています。すべての財産は、神から来たものです。私たちのものではなく、主の所有しているものです。そして、他人のものをきちんと管理できているからこそ、御国における霊的な財産が与えられるという報酬があるということです。

16:13 しもべは、ふたりの主人に仕えることはできません。一方を憎んで他方を愛したり、または一方を重んじて他方を軽んじたりするからです。あなたがたは、神にも仕え、また富にも仕えるということはできません。」

永遠の住まいのために富を使っていくのか、それとも地上において富を蓄積しているのか、その違いがあります。前者は神に仕えることであり、後者は富に仕えることです。富に仕えることは、私たちの心に痛みと疲れを及ぼします。確かに豪華に暮らしていけるでしょう、けれども、心労が絶えずあります。

## **2A 人の前の正しさ 14-18**

16:14 さて、金の好きなパリサイ人たちが、一部始終を聞いて、イエスをあざ笑っていた。

ここから、パリサイ人の話に移ります。弟子たちに対するイエス様の言葉を聞いていました。そして、ここでの問題は「金の好きな」ということです。

16:15 イエスは彼らに言われた。「あなたがたは、人の前で自分を正しいとする者です。しかし神は、あなたがたの心をご存じです。人間の間であがめられる者は、神の前で憎まれ、きらわれま

す。16:16 律法と預言者はヨハネまでです。それ以来、神の国の福音は宣べ伝えられ、だれもか

れも、無理にでも、これにはいろいろとしています。16:17 しかし律法の一画が落ちるよりも、天地の滅びるほうがやさしいのです。16:18 だれでも妻を離別してほかの女と結婚する者は、姦淫を犯す者であり、また、夫から離別された女と結婚する者も、姦淫を犯す者です。

興味深い言葉です。一つ一つが、つながっていないように見えますが、実は一つの話です。パリサイ人たちは、自分たちが見た目に人々に良く思われることを願っていました。それを、イエス様は、「人の前で自分を正しくする者」と言われたのです。しかし、福音は違います。福音は、人の外側の行いではなく、その行ないを出すところの心の内を取り扱います。パウロが、ローマ人への手紙 2 章 16 節でこう言いました。「私の福音によれば、神のさばきは、神がキリスト・イエスによって人々の隠れたことをさばかれる日に、行なわれるのです。」人々の隠れたところにしたがって、神は私たち一人一人を裁くのです。人の目には正しいと認められても、福音は神の目に正しいことを求めます。

そして、イエス様は律法と預言者について語られます。バプテスマのヨハネをもって、旧約時代が終わりました。それからは福音が来ています。それゆえ、罪人や取税人が大勢集まってきて、イエスと食事をしているのです。「だれもかれも、無理にでも、これにはいろいろとしています。」というのは、すごいことですね。悔い改めて、イエス様の名を信じれば、罪の赦しを得て永遠の命に入れるからです。

ここで、イエス様が語られていた時から誤解されていたことがあったようです。それは、「福音は律法とは無関係だ。」というものです。しかし、そうではありません。律法は一文字でも変わることはありません。ですから律法が破棄されることはありません。律法を行なうということの意味が変わりました。律法という文字に従うのではなく、愛の律法、キリストの律法に従うのです。

その一例として、イエス様は離婚の問題を取り上げておられます。律法には、気に入らないことがあれば離婚状を出してもよい、という箇所がありますが、それを良いことに自分の好きな人が妻以外に見つけた時に、難癖をつけて離婚して、その他の女に付くようなことが行われていました。ですから、表向き、律法を守っているように見えるのですが、実は「姦淫をしてはならない」という戒めをことごとく破っていたのです。

今、イスラム国がどんどん残虐なことを行なっていますが、彼らは自分たちこそがシャリア、すなわちイスラム法を守っていると言っています。そして、自分のように信じないムスリムは背教者として、残虐に殺していきます。けれども、興味深い記事を読みました。イスラム過激派は、ポルノ中毒になっているということです。彼らの行動を監視して、証拠を積み上げていくと中毒になっている様子が分かります。女性は被り物をしなければいけないと厳しく命じ、そうではないと死刑にさえ処する彼らが、自分の肉の欲望に対しては何ら効き目がないのです。

### 3A 金持ちとラザロ 19-31

このようにして、イエス様は彼らの心が金銭への愛で汚れていることを指摘されました。そこで、イエス様は一つの話を書かれます。有名な「金持ちとラザロ」の話です。あざ笑った金好きのパリサイ人たちに対して、「あなたがたは、この金持ちのようになる。」という警鐘を与えられました。

ところで、この話は譬えでないことに注目してください。譬えとしての導入もなく、そのまま話をされるイエス様の様子を伺うと、これは実話であることに気づきます。そういう意味で、ここに出てくるハデス、その中の苦しみの場所もあるということは、これも実在の所だということです。

### 1B ハデスにある二つの行き先 19-26

16:19 ある金持ちがいた。いつも紫の衣や細布を着て、毎日ぜいたくに遊び暮らしていた。16:20 ところが、その門前にラザロという全身おできの貧乏人が寝ていて、16:21 金持ちの食卓から落ちる物で腹を満たしたいと思っていた。犬もやって来ては、彼のおできをなめていた。

ラザロは、全身おできができています。門前と言っていますが、金持ちの家のところにある門のことです。エルサレムに行くと、城壁の門のところ、同じようにおできができていて、膿まで出ている乞食が時々いますが、そのような感じでそこにいました。そして、金持ちは食事をする時に、昔は手拭きがなく、しかも手を使ってご飯を食べていたので手が汚れます。それをパンでふき取って、そのパンを貧しい者に投げるのです。同じようなところに、犬もいます。犬は、聖書では良い意味で使われていません。これは、貧しいラザロの悲惨さを際立たせています。しかし、二人の運命は死後に正反対になります。

16:22 さて、この貧乏人は死んで、御使いたちによってアブラハムのふところに連れて行かれた。金持ちも死んで葬られた。16:23 その金持ちは、ハデスで苦しみながら目を上げると、アブラハムが、はるかかなたに見えた。しかも、そのふところにラザロが見えた。16:24 彼は叫んで言った。『父アブラハムさま。私をあわれんでください。ラザロが指先を水に浸して私の舌を冷やすように、ラザロをよこしてください。私はこの炎の中で、苦しくてたまりません。』16:25 アブラハムは言った。『子よ。思い出してみなさい。おまえは生きている間、良い物を受け、ラザロは生きている間、悪い物を受けていました。しかし、今ここで彼は慰められ、おまえは苦しみもだえているのです。16:26 そればかりでなく、私たちとおまえたちの間には、大きな淵があります。ここからそちらへ渡ろうとしても、渡れないし、そこからこちらへ越えて来ることできないのです。』

アブラハムのふところという言葉が出てきます。ハデスという言葉が出てきます。イエス様は先ほどから律法と預言者について語られていますが、その時代に死んだ人たちが行く所が描かれています。旧約聖書を見ると死後に行く所として何が出てくるのでしょうか。陰府ということばが出てきます。それをギリシヤ語に訳すとハデスになります。英語だと Hell、地獄と訳されています。



天国は？と思うかもしれませんがそれを今から話したいと思います。唯一、神のおられるところである天におられる人というのはアダムだったのです。エデンの園にいて神とともに語り、神とともにいました。彼が罪をおかしたから神から引き離されて、彼から出てくる子孫は皆罪人として生まれてくるので、この神のおられるところには戻る事が出来なくなっています。けれどもアダムが罪を犯した直後に神は救い主が来られる事を教えられました。女の子孫という言葉が出てきます。そして神様はその後に動物を犠牲にして皮の衣をアダムとエバに着せてあげました。それは後に来る救い主をあらわしていました。救い主御自身が犠牲となって、私たちの罪を負って下さるということでした。そのことを信じる者たちが救われるわけです。

つまり旧約の時代に生きていた人たちは、救い主が訪れる事、キリストが訪れることを信じる事によって、救われるのです。その代表的な人物がアブラハムです。アブラハムは神を信じて、義と認められた代表的な人物です。ですから救い主を信じた人々は、死後黄泉に下ってアブラハムがいるのでなぐさめられたのです。ですからアブラハムのふところと書かれてありますがあくまでもハデスなのです。天国ではありません。

なぜかという、まだキリストが贖いのわざを完成されていなかったからです。旧約において罪は覆われましたが、取り除かれてはいませんでした。動物の血によっては、罪は取り除かれませんがヘブル書には書かれてあります。覆われはしましたが、取り除かれてはいませんでした。けれども天に入ることができるのは全く正しくされた者です。そのような者のみが、入ることができるから旧約の人たちは(まだ)入ることができませんでした。けれども私たちの心から罪を取り除くかた、キリストが来られるのです。それまでアブラハムはキリストの贖いを完成される方によってわたしたちは天に昇る事ができるのだという、そこにいる人々を励まし、慰めていたのです。

キリストが十字架につけられて死なれた時、イエス様はどこに行かれたのでしょうか。このハデスに下られました。ペテロがこう言っています。「キリストの復活について、『彼はハデスに捨てて置かれず、その肉体は朽ち果てない。』と語ったのです。(使徒 2:31)」つまりイエス様はハデスに下られたのです。そして何をされたかという、贖いが完成されましたと宣言されたのです。解放の宣言をされました。イザヤが「主は捕われ人に解放を告げる。」と言っています。そして解放された彼らがイエス様と一緒に天に引き上げられて行きました。パウロはこう言っています。「そこで、こう言われています。『高い所に上られたとき、彼は多くの捕虜を引き連れた。(エペソ 4:8)』」

それでイエス様がそのようにされたので、これらの人々が天国に入ることがゆるされるようになりました。けれども、ハデスにはアブラハムのふところと言われる所とまた別の場所があることに気付いてください。苦しみのある場所ですね。この金持ちがいる場所です。これは黙示録に書かれています。こう書いてあります。「死もハデスも、その中にいる死者を出した。そして人々はおのおの自分の行ないに応じてさばかれた。それから、死とハデスとは、火の池に投げ込まれた。(黙示録 20:13-14)」わかりますか。旧約の時代にキリストを信じないで死んだ人々、あるいはキリスト

が来られました今の時代にキリストを信じないで死んだ人々が最後の審判まで閉じ込められている場所です。それが金持ちのいる苦しみ場所です。最後の審判のときに自分たちのおこないに応じて裁かれて火の池(ゲヘナ)に投げ込まれてしまいます。

この二つの部分が一つのハデスにあります。そしてそれは、互いに行き来できません。このように生きている間に人の運命は定められます。主イエスを信じた者は永遠の命、拒む者は永遠の滅びです。偽りの教えが救いについてありますが、一つは「セカンド・チャンス」と呼ばれるものです。ハデスに送られた人々が、イエス様の福音を聞く機会が与えられそこで救われる可能性があると言います。もう一つの偽りの教えは、「死んだら無意識になる。」というものです。金持ちもラザロも、死後にしっかりと意識を持っています。

## 2B 復活しても聞かない心 27-31

16:27 彼は言った。『父よ。ではお願いします。ラザロを私の父の家に送ってください。16:28 私には兄弟が五人ありますが、彼らまでこんな苦しみ場所に来ることのないように、よく言い聞かせてください。』16:29 しかしアブラハムは言った。『彼らには、モーセと預言者がいます。その言うことを聞くべきです。』16:30 彼は言った。『いいえ、父アブラハム。もし、だれかが死んだ者の中から彼らのところに行ってやったら、彼らは悔い改めるに違いありません。』16:31 アブラハムは彼に言った。『もしモーセと預言者との教えに耳を傾けないのなら、たといだれかが死人の中から生き返っても、彼らは聞き入れはしない。』』

これは、実際にそうなのだということを私たちは確認できます。金持ちは、ラザロが生き返りさえすれば、自分の兄弟たちはこんなところに来なくてもよくなると思っています。ラザロが生き返れば、その奇蹟によって信じるだろうと考えます。けれども、同じような時期に、同じ名前のラザロがヨハネ 11 章に登場します。このラザロはよみがえりました。しかし、「そのうちの幾人からは、パリサイ人たちのところへ行って、イエスのなされたことを告げた。(ヨハネ 11:46)」とあるのです。復活を見ても、なおのこと信じなかったのです。そして続けて読むと、ユダヤ人指導者はイエスを殺すことを決めました。その理由と言うのが、自分たちの土地や国民が奪われるかもしれない、というものでした。自分たちの富に彼らはすがっていたのです。ですから、心に富があるので、どんなに奇蹟を見ようが、それが助けにはなりません。

アブラハムは、「モーセと預言者」と言っています。まさに彼らがこれを守っていると言っていたものです。けれども、表向きには守っているようでも、実は福音によって生きることによって、律法の言っていることを成就させることができます。ヨハネ 11 章のラザロは、まさに福音にあずかりました。死んだけれども、イエス様の言葉によって生き返るものとなったのです。

これをイエス様は、パリサイ人に警告しました。富を愛することは、まさに地獄に行くことになるのだということです。復活でさえ、信仰に至らせないその頑なさは、富に頼っているところにあります。

自分の生活の保障と守りを、神に置いているのか、それとも財産に置いているのか、後者であるとどんなことをしても神に近づこうとしないという現実があります。それで、後にイエス様は、「金持ちが神の国に入るのは、らくだが針の穴を通るより難しい。」と言われたのです。私たちは、キリストの弟子として、むしろ神の国のために時間と富を費やしているか、今の全生活が主のものであり、仕事をするのも主のため、食べるのも飲むのも主のためになっているかどうか、あるいはパリサイ人のように世の思わずらいや富の誘惑によって実を結ばないままにいるのか、問わないといけません。